

平成 30 年 5 月 21 日現在

機関番号：82610

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07464

研究課題名(和文)「専門看護師の科学的根拠に基づく実践」のための教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of Educational Program for Evidence-Based Practice for Certified Nurse Specialists

研究代表者

友滝 愛 (Tomotaki, Ai)

国立研究開発法人国立国際医療研究センター・その他部局等・助教

研究者番号：50621835

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は専門看護師14名を対象に「科学的根拠に基づく実践(Evidence-based practice(EBP))と文献の批判的吟味」に関するインタビューを行い、EBPの捉え方、文献の批判的吟味の阻害要因・促進要因を明らかにした。そして、科学的根拠に基づく実践のための文献の批判的吟味のための教育プログラムを開発し、9グループ26名(このうち本研究の対象となる専門看護師は11名)にプログラムを提供した。

研究成果の概要(英文)：Interview regarding to Evidence-based practice(EBP) and critical appraisal of articles for 14 nurses with certified nurse specialists showed that perception to EBP and facilitators and barriers to EBP. The educational program for critical appraisal of article for EBP was developed. This program was provided for 26 nurses among 9 groups participated in the program and CNS who met with criteria were 11 nurses.

研究分野：臨床疫学、看護情報学

キーワード：科学的根拠に基づく実践 専門看護師 文献の批判的吟味 継続教育 教育プログラム

## 1. 研究開始当初の背景

科学的根拠に基づく実践 (Evidence-Based Practice: EBP) の重要性は、看護師に広く認識されている一方で、多くの看護師は、臨床実践に科学的根拠を統合できおらず、EBPに必要な知識・スキルが不足していると認識していることが、先行研究で明らかとなっている (Saunders H, et al. (2016, 2017))。看護師の EBP を阻害する要因には、「組織の特性」、「ケアを変更する権限が十分でないこと」、「研究に関する知識やスキルの不足」、「時間の不足」等が指摘されている。

EBP は看護実践の質を保証し、最善の看護を提供するもので、EBP の実装戦略のとして "Create Awareness & interest", "Build Knowledge & Commitment", "Promote Action & Adoption", "Pursue Integration and Sustained Use" を進めるといった特徴があり (Cullen L, et al. 2017)、EBP では臨床実践と学術的な視点の両方が求められる。このようなことから、現在行っているケアの方法から、EBP への取り組みへと変化を促すといった役割は、修士課程の教育を受けた臨床看護師、とくに日本では、専門看護師 (Certified Nurse Specialist: CNS) の役割と共通しているといえる。

CNS 養成課程では、臨床実習をはじめとして、CNS に組織の中で求められる役割であるリーダーシップ・組織マネジメントについても、教育が行なわれている。その一方で、看護研究方法論や課題研究も、カリキュラムに含まれているものの、その単位は少ない。また、従来から、看護系大学・大学院における量的研究の方法論に関する教育は十分ではなく、教育機関によって教育内容にばらつきがあることが指摘されている (田中ら, 2014)。そのため、CNS 養成課程では、EBP 教育の有無に関わらず、エビデンスを実践へ適用するときに必要なコミュニケーションやマネジメントの知識・スキルの教育を受ける機会が多いが、EBP に必要な「臨床疑問の定式化」や「文献の批判的吟味」に必要な知識・スキルを習得する機会が少ないと考えられる。

臨床家を対象とした EBP 教育は、欧米を中心に、様々な EBP の教育プログラムが提案・開発され、多くの先行研究において、EBP の教育プログラムは、EBP に必要な知識やスキルの向上に寄与することが報告されている。例えば教育方法には、講義形式、アクティブラーニング形式、その両方を含むものなどがあるが、近年は、アクティブラーニング形式の教育方法が評価される傾向がある。アクティブラーニング形式の教育方法には、小グループによるワークショップ、ジャーナルクラブ、症例検討会などがあり、とくに文献の批判的吟味のスキルは、従来から行われているジャーナルクラブと比べて、EBP に焦点を当てたアプローチによる方法のほうが、効果が期待できる可能性も指摘されている。しかし、効果的な教育プログラムのエビデンスはまだ明確にはなっていない。

日本においては、臨床看護師を対象とした EBP に関する研究は少なく、EBP のための教育プログラムはまだ確立されていないのが現状である。そこで本研究では、臨床看護実践での EBP を推進する役割を担う CNS を対象として、EBP と文献の批判的吟味に関する研究を行うこととした。

## 2. 研究の目的

日本の看護実践における EBP の普及を目指し、本研究の目的は以下の3つとした。

(1) CNS へのインタビューを行い、EBP と量的研究の文献の批判的吟味について、明らかにする。

(2) インタビューをふまえ、CNS を対象とした EBP のための文献の批判的吟味に関する教育プログラムを開発する。

(3) EBP を目的とした文献の批判的吟味に関する教育プログラムを実施し、プログラム参加後の変化を評価する。

## 3. 研究の方法

### 3.1 EBP と量的研究の文献の批判的吟味に関するインタビュー

対象者の適格基準は、日本看護協会が認定した CNS の資格を有している、CNS として、患者ケアに携わる活動を行っている看護師 (患者ケアに関する看護師への教育・指導も含む)、これまで個人または組織として EBP に取り組んだことがある、または、EBP に関心がある・これから取り組む予定があるので、研究代表者・研究協力者の知り合いを通じて募集を行った。

インタビューガイドに従い、半構造化面接を行い、録音データの逐語録を作成し、質的記述的に分析した。

なお、本インタビューは、国立国際医療研究センターの研究倫理審査の承認を受け、対象者に本研究について説明し、書面で同意を得てから、実施した。

### 3.2 EBP のための文献の批判的吟味に関する教育プログラムの開発

教育プログラムで使用する教材は、イギリスでは EBM 始まった CASP (Critical Appraisal Skills Programme) の活動である CASP Japan (<http://casppj.umin.ac.jp/>) で公開されている教材のうち、「EBM セミナー用パッケージ」、「CASP ランダム化比較試験用チェックシート」を、許可を得て一部改編した。

教育プログラムのデモンストレーション (大学教員、大学院生、臨床看護師を対象に、各1回ずつ) を経て、教材の見直しとプログラムの構成を検討し、教育プログラムを開発した。また、デモンストレーションの段階で、グループワークでの講師の担当者 (研究代表者) は、ワークファシリテーションの専門家によるチェックを受けた。

### 3.3 EBPのための文献の批判的吟味に関する教育プログラムの実施・評価

研究デザインは、教育プログラムの実施前後を比較する対照群なしの介入研究で、3.2で開発したプログラムを実施した。プログラムの実施は、申込のグループ単位で行い、対象者の条件は「臨床で働く CNS を1人以上含むグループ」で、臨床で働く CNS が1人以上含まれていれば、他の人も参加可とした。募集方法は、研究代表者・研究協力者の知り合いに依頼、CNS が参加するメーリングリストへの投稿、研究班メンバーを通じて病院に依頼、とした。

評価は、ベースライン・各 Module の終了時、Module3 終了後3・6か月後で設定し、評価指標は、以下とした。

アウトカム評価：Evidence-Based Practice Questionnaire 日本語版(Tomotaki, et al. (2018))、研究代表者が作成した研究デザイン・統計に関する知識テストを用いた。プロセス評価：参加後の態度や行動の変化を、振り返りシート・インタビューで行った。

プログラム評価：プログラムの内容、プログラムを担当した講師に対する評価を、記入してもらった。

なお、本プログラムは、国立国際医療研究センターの研究倫理審査の承認を受け、対象者に本研究について説明し、書面で同意を得てから、実施した。

## 4. 研究成果

### 4.1 EBPと量的研究の文献の批判的吟味に関するインタビュー

14名の CNS の協力を得た。対象者の専門分野は、小児看護、老人看護、がん看護、感染症看護、急性・重症患者看護、家族支援、母性看護、精神看護、慢性疾患看護の9分野で、CSNとしての経験年数は0年～8年(中央値：4年)、臨床看護師としての経験年数は8年～28年(中央値：14年)であった。所属は、大学病院、一般病院、専門病院、その他施設で、組織内での配属は、病棟配属、部署専属であった。また、学歴は CNS コース(修士課程)修了、博士課程在籍中、博士課程修了者であった。

#### (1) 対象者が認識する「EBPにおける文献の使い方」

EBPにおける文献の使い方としては、「今行っているケアにエビデンスがあるかを調べる」、「ケアの手順書等の作成時にエビデンスを確認し、手順書等に反映する」、「患者によりよいケアを検討する過程で、エビデンスを考慮する」があった。

#### (2) CNS養成課程在籍中の文献の批判的吟味

対象者は、量的研究の文献を十分に批判的

吟味できていなかったと感じていた。

CNS養成課程在籍中に、量的研究の文献を批判的吟味する機会が少なかったと感じる背景として、「所属する研究室の指導者の専門が質的研究だった」、「対象者自身が取り組んだ研究が質的研究だった」、「学内(所属する研究室を含む)で抄読会やジャーナルクラブの機会がなかった」等があげられた。

#### (3) CNS資格取得後の文献の批判的吟味

CNS資格取得後、実践者として活動する中で、文献を読む頻度や、文献をどの程度批判的に吟味しているかは、様々であった。

文献の批判的吟味に影響を及ぼすと思われる要因として、ケアに対する疑問、科学的根拠の必要性の認識、EBPに理解がある仲間の存在、抄読会の参加、論文を読む習慣、英語論文の読解、文献検索のスキル・環境があげられた。

### 4.2 EBPのための文献の批判的吟味に関する教育プログラムの開発

本プログラムの構成は以下となった。

【Module1】文献の批判的吟味のワークショップ(対面式、1日/約5時間)

- ・ 研究の主旨説明
- ・ EBP概要の講義
- ・ グループ形式による文献の批判的吟味
- ・ Module1の振り返り

【Module2】文献の批判的吟味の練習(自己学習・e-mail、約1か月)

- ・ Module1で使用した論文を、もう一度、批判的に吟味する。
- ・ Module1と同じメンバー同士で、メールを利用して、相互に意見交換を行う。

【Module3】臨床疑問の定式化と振り返りのワークショップ(対面式、1日/約3時間)

- ・ Module2の振り返りを行い、文献の批判的吟味を通じて生じた疑問点を解決する。
- ・ Module1で使用したシナリオを用いて、臨床上の疑問を定式化する。そして、Module1,2で読んだ論文のエビデンスが臨床実践でどのように役に立つかを検討する
- ・ Module3の振り返り

【フォローアップ】

- ・ EBPの学習を継続するための課題の特定と行動計画の立案
- ・ Module3で検討した課題と行動計画のモニタリング

批判的吟味で使用する論文は、ランダム化比較試験による論文とし、グループごとにヒアリングを行い、ヒアリングに基づいて講師担当者が検索し、決定した。論文が英語の場合は、講師担当者が翻訳した。そして、補足資料として、論文中で使用されている研究デザイン・統計手法に関する脚注の資料を、論文ごとに作成し、配布した。脚注資料は、生物統計の専門家の監修を経て、作成した。

教育プログラムの参加者は1グループ2~4名で、講師は1グループにつき1名とした。

#### 4.3 EBPのための文献の批判的吟味に関する教育プログラムの実施

9グループ26名に対し、グループごとにワークショップを開催した。開催地は東京・広島・山形であった。

参加者の内訳は、本研究対象の CNS は 11 名( CNS の専門分野はがん、小児、慢性疾患、急性・重症患者、母性、感染)で、それ以外では大学教員・研究員として活動している CNS、CNS 候補生、認定看護師、スタッフナース(大学院修士課程修了者含む)、臨床教員であった。参加者の所属は、大学病院、民間病院、公立病院、専門病院、その他施設等であった。

参加の動機・目的は、「量的研究の文献の批判的吟味に関する知識・スキルの習得」や「仲間への学習機会の提供」であった。

本プログラムは、7グループで全ての教育プログラムの提供が終了し、2グループは2018年4月にModule3終了予定である。本プログラムで使用した論文は以下となった。

- Reade MC, et al. Effect of Dexmedetomidine Added to Standard Care on Ventilator-Free Time in Patients With Agitated Delirium: A Randomized Clinical Trial. JAMA. 2016; 315(14): 1460-8.
- Channon SJ, et al. A Multicenter Randomized Controlled Trial of Motivational Interviewing in Teenagers with Diabetes. Diabetes Care. 2007; 30(6): 1390-5.
- Tsuchihashi-Makaya M, et al. Home-based disease management program to improve psychological status in patients with heart failure in Japan. Circ J. 2013;77(4):926-33.
- Rickard CM, et al. Routine versus clinically indicated replacement of peripheral intravenous catheters: a randomised controlled equivalence trial. Lancet. 2012; 380(9847): 1066-74.
- Lussier MM, et al. Daily Breastmilk Volume in Mothers of Very Low Birth Weight Neonates: A Repeated-Measures Randomized Trial of Hand Expression Versus Electric Breast Pump Expression. Breastfeed Med. 2015; 10(6): 312-317.
- 野末, 他. がん患者の抑うつ状態に対する精神看護専門看護師によるケアの効果—無作為化比較試験による検討—. 日本看護科学会誌, 2016;36:147-155.
- 香月, 他. 精神科看護師のストレスマネジメント・エンパワメントプログラムの効果に関する研究 無作為割付比較試験を用いた研究 . 日本精神保健看護学会誌 2013;22(2): 1-10.

以上の取り組みについて、2018年3月に、本研究の研究報告会を開催し、研究の報告と参加者同士の意見交換を行った。

本プログラムのアウトカムを評価するための追跡調査(自記式調査票・インタビュー)は、3グループについて、3ヵ月後フォローアップ調査が終了し、残りの6グループについても、順次フォローアップ調査を行い、今後はデータを分析する予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

友滝愛, 深堀浩樹, 津田泰伸, 大久保豪, 柏木公一, 酒井郁子. 専門看護師による科学的根拠に基づく実践の取り組み. 第4回日本 CNS 看護学会 学術集会. 2017年6月. 東京.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

○取得状況(計 0 件)

〔その他〕ホームページ等

【研究活動】専門看護師の科学的根拠の実践に基づく実践のための教育プログラムの開発

[https://researchmap.jp/jo3pzn23h-1963233/#\\_1963233](https://researchmap.jp/jo3pzn23h-1963233/#_1963233)

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

友滝 愛 (Ai Tomotaki)

国立看護大学校 人間科学 情報学 助教

研究者番号: 50621835

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

浦山 絵里 (Eri Urayama)

大久保 豪 (Suguru Okubo)

奥村 朱美 (Akemi Okumura)

柏木 公一 (Kimikazu Kashiwagi)

柏原 康佑 (Kosuke Kashiwabara)

酒井 郁子 (Ikuko Sakai)

津田 泰伸 (Yasunobu Tsuda)

深堀 浩樹 (Hiroki Fukahori)

(名前順)